感性を育む和学講座第２８回

～「傘」と「日本の結婚」 貞明皇后　古事記～

傘とは

傘が手離せない毎日です。さて、今回は「傘」についてお話しましょう。
「傘」というと、日傘と雨傘のどちらをイメージされますか。
日本なら、やはり雨傘でしょうか。意外に思われるかもしれませんが、「傘」は日傘から始まります。
日本に入ってきた時期は明確にはわかりませんが、舒明天皇の時期に、仏具の一つとして百済から献上されています。当時は日射を避ける「日傘」として用いられました。
中国で「天蓋（開閉できない」として発明され、貴人などに魔除けとして差し掛けられていました。

日本に伝わると、「衣笠」「絹笠」といわれました。
その後日本で改良され、開閉式が用いられるようになり、雨傘として使われるようになっていきます。
平安時代になると、製紙技術により和紙で竹の骨組みの和傘が作られました。

安土桃山時代には和紙に油を塗布することで防水性を持たせ、現代と同じ目的で使われるようになります。

江戸時代になると分業制が発達し、広く普及します。職を失った武士の内職として傘の制作を行ったりもしていました。
江戸時代の町人の姿を描いた絵画にも、夕立の中傘をすぼめて急ぐ町の人たちが描かれており、このころには庶民にとっても生活必需品でありました。

　和傘は、洋傘の骨が数本程度に比べて、数十本の骨組みのためとても重いのです。
洋傘は6～8本ぐらいですが、和傘は数十本使います。
洋傘でも、耐久性やデザインによっては16本や24本のものもあります。
特に16本の傘は菊の紋章の花弁と同じ数ということで、皇室で使用されているそうで

す。

　明治時代になり、洋傘が入ってくると、和傘は急速に使われなくなっていきます。
西欧で傘が使われるようになったのは、ギリシャ時代からと云われています。
貴婦人が従者に日射を避けるために傘を持たせて歩いている絵が残されています。
その絵からも推察されるように、西欧では傘は贅沢品で遺産相続の対象になるものでした。

　フランスには16世紀にアンリ2世にイタリアから嫁いだカトリーヌ王女が持ち込みました。フランスでは町中で2階から汚物が投げ捨てられるので、女性にとっては必需品だったようです。

また、イギリス紳士は雨が降っても傘を使わず濡れていました。イギリスでは、雨傘は女性が使うもので、男性は日傘としてだけ使っていたのです。

同じ形の傘ですが、お国が違えば使用目的も、そして傘に対する見方も違ってくるのが面白いことです。

昨今はビニール傘が普及しています。安価なものから、皇族の方がお使いになられる高価なものまであります。コンビニなどで売られており、千円以下で買い求めることができるからか、折り畳み傘が売れなくなっているようです。
皇族の方たちは、特に雨の園遊会でお使いになられます。国民から天皇陛下や皇后陛下のお顔がよくみえるようにという心遣いからです。

さて、傘のマナーについてですが、お人に向けて開かない、濡れて傘は、電車の中でお人に触れないなどがあります。意外とやってしまいがちなのは、長い傘を横に持つこと。
必ず、縦に持つようにしましょう。

上から降ってくる雨や日差しから守ってくれる傘は、その性質から比喩的表現にもよく使われます。

・降らずとも傘の用意を
　利休七側のひとつ。いつでも不慮の事態に備えをわすれないようにという意味

・銀行は晴れているときに傘を貸し、雨が降ったら貸した傘を取り上げる
　傘は資金のことで、業績が良くて借りずに済むときにはお金を借りてくれと言い、
　業績が悪化して、資金が必要な時には、貸したお金を取り上げる

雨が降っているときに、傘を持たない人に会えば、小さな傘でもそっと差しだす、そんな人でありたいものです。

日本における婚礼の歴史

　結婚式の起源は「古事記」のイザナギノミコトとイザナミノミコトが、天御柱を廻って出会ったところでお互いに愛を告白するという有名なお話にあるそうです。
この有名な話が結婚式の原点と伝えられています。

　現代のような婚礼の儀式は室町時代頃に確立されます。結婚は家と家の結びつきという意味合いが濃くなり、武家社会では政略結婚も当たり前になるのです。
花嫁は輿に乗って、婿の家に向かいます。家に着くと、三々九度の元になった、盃に三度酒を注ぐ「式三献」を、白装束姿で二人だけで行います

。2 日目の夜には婿の家で用意された色ものの衣装に着替え、お色直しを行い、ここで初めて婿の家族と対面することになります。
　安土・桃山時代に来日していたルイス・フロイスは「日本では結婚式は行われない」と残していますが、有力な武家の婚礼は盛大に行われています。また、まだ下級武士だった豊臣秀吉と正妻のねねも、土間に藁を引き、割れたとっくりと盃で祝言を行ったと記録に残っています。

　江戸時代に仲人制度が生まれます。仲人が男女を引き合わせる「見合い」が始まるのです。
婚礼は家同士の結びつきという考えがより強くなり、結納も取り交わすようになりまし

た。

現代のように、挙式と披露宴が組み合わさった結婚式が行われるのは明治時代になってからです。それまでは神や仏の前で夫婦になることを誓う、現代の挙式に当たるような儀式は行っていません。祝言であり、いわば披露宴のみだったのです。
明治時代に西欧の文明が入ってきてから結婚式も様変わりしました。
仏前結婚式は 1892 年宗教家によって初めて執り行われました。
1900 年嘉仁皇太子(後の大正天皇)と九条節子様(後の貞明皇后)の宮中においての神前結婚式が全国に報じられます。当時は西欧と並ぶためにキリスト教の一夫一婦制を取り入れる必要性があったのです。
皇太子の結婚の儀を模して、東京大神宮が神前結婚式を創始します。
以後、日本でも宗教的な結婚式が一般的になっていくのです。

西欧においては、宗教的な儀式の要素もあり、古くから教会で神に誓うという形の挙式が慣習化していました。日本は八百万の神様と仏様が存在する文化であり、一神教の西欧とは婚礼に対する考えが違っていたのでしょう。明治時代まではある意味おおらかだったと言えます。また、磯田道史著「江戸備忘録」によると江戸時代の離婚は現代より多かったようです。宇和島藩の残されている正確な記録には藩士の 4 割が離婚経験者と記されているそうです。再婚者も6割ほど存在して、男性も女性も離婚後すぐに再婚できました。
一度結婚したら一生添い遂げるという概念は、明治時代後期に確立されたものでしょう。
明治 31 年に「民法」が定められ、女性が結婚前は父親、結婚後は夫に従うことを求められました。また、結婚後は家事、育児のみ許され、女性が働き自立することを良しとはしませんでした。主観ですが、開国後西欧文化、思想が日本を覆ったことに関連しているとは考えすぎでしょうか。中世から教会が結婚を取り仕切っていた西欧では、離婚を許されていませんでしたから。

開国以前は身分の高い女性はともかくとして、一般的には女性もある意味、現代より自由でおおらかだったと言えるのではないでしょうか。
また、日々の生活を共に送るパートナーを、西欧では神に許しを求めるために挙式を行っていましたが、日本では家族や一族、身近な人々に紹介して受け入れてもらう祝言でした。